

CSI | Center for Social Innovation Initiatives

JOURNAL 2022

点がおこす波紋、線がつなぐ未来。

CSIクロストーク

芽ばえた「思い」の、

その一歩をサポートするために。

公立大学法人 長野県立大学 安藤 国威 理事長

ソーシャル・イノベーション創出センター 秋葉 芳江 センター長

グローバルマネジメント学部3年 行徳 ゆりなさん

グローバルマネジメント学部1年 大崎 琉雅さん

CSI活動報告

産官民学の連携／地域で活躍する学生たち

公開講座／ゼミとのとりくみ／人材育成

SDGs／地域コーディネーターの活動



長野県立大学

THE UNIVERSITY OF NAGANO

Cross Talk

クロストーク



グローバルマネジメント学部1年
大崎 琉雅 さん

ソーシャル・イノベーション創出センター
秋葉 芳江 センター長

公立大学法人 長野県立大学
安藤 国威 理事長

グローバルマネジメント学部3年
行徳 ゆりな さん

What is CSI?

芽ばえた「思い」の、 その一步をサポートするために。

2018年の長野県立大学開学と同時に設立されたCSI（ソーシャル・イノベーション創出センター）も、5年が経過。これまで培ってきたオープン・イノベーションの仕組みや学生との関わりを振り返り、もう一度、その役割や目指すべき方向を、学生との会話の中から浮き彫りにしていきます。

思いついたら相談にいける場所 それがCSI

安藤 今日は学生の皆さんとじっくり話せると聞いて、楽しみにしてきました。あまり気負わずに、ざっくばらんに話しましょう。

行徳 ありがとうございます。緊張はしていますが、私たちも楽しみにしてきました。今日はよろしくお願いします。

大崎 心臓がバクバクしていますが、せっかくのチャンスなのでいろいろな話をお二人から聞きたいと思っています。よろしくお願いします。

秋葉 こちらこそ、よろしくお願いします。行徳さんは今年度、長野県立大学が包括連携協定を結んだ王滝村のプロジェクトに参加しているんですね。

行徳 はい。まずは自己紹介も兼ねて、王滝村のプロジェクトで感じたことや、得たことなどをお話したいと思います。このプロジェクトでは、学生9人が、3人1チームの3チームに分かれて、王滝村の地域活性化や自己啓発に取り組みました。「推し活チーム」「映像チーム」「ファンチーム」の3チームが、それぞれの視点で王滝村と関わり、さまざまなことに挑戦しました。私は「ファンチーム」の一員として、王滝村の人たちと同じ目線で村の行事やイベントに参加してもらい、王滝村の人の温かさや、迎え入れてくれる懐の大きさなど、目には見えない魅力を知ることができました。また、村民の方にとって当たり前のこと、課題だと思っていることが、私たちにとっては「魅力」になるというギャップを発見することもできました。

安藤 それは素晴らしい気づきですね。地方の小さな町や村は、隣の芝生を見て、自分のところの芝生の青さに気づいていないことが多々あります。そういう地域のポテンシャル、魅力を見つけてさらに発展させ、価値を高めていくためには、まずは自らが魅力に気づくということが大事なんです。それをあなたたちが、王滝村の人たちと一緒に見て見いだしたというプロセスも素晴らしいと思います。

秋葉 この活動はCSIとして、まさに理想的なプロジェクトだと思います。王滝村は長野県立大学の開学前からおつきあいのある地域なのですが、そこに学生たちが実際に足を運び、人とふれあい、学んだことを活かして地域の未来を思い描いていく。地域の魅力を発掘する過程で光が当たるのは、県大の学生たちであり、地域であって、CSIは黒衣でいいわけです。このプロセスがオープン・イノベーションにつながり、さまざまな人たちが多様な視点で地域の課題解決に取り組む、その一步を支援できたことを嬉しく思っています。

大崎 なんだか、話を聞いているだけでワクワクしてきます。王滝村って南信のほうの村なんですね。

行徳 長野県の南西部に位置する、岐阜県との県境にある村です。御嶽山の麓にある村といった方がわかりやすいかな。長野県内では一番大きな村なんです。自然豊かなとても素敵なおとこです。遊びに行ってみてください。

大崎 お話を聞いて興味を持ったので、ぜひ行ってみたいと思います。こんなにすごい話を聞いた後で自分の話をするのはプレッシャーですが、まだ模索中の1年生ということで、よろしくお願いします。私は、中学、高校と生徒会に参画して新しい委

員会を発足するなど、昔から「やってみたい」「面白そう」など、思ったことがあればすぐにチャレンジするタイプの人間です。そんな自分にとってCSIは、まさに理想的な相談場所です。先日も、落ち葉で焼き芋を焼いたことがないからやってみたいと思ひ立ち、CSIに相談に行ったら農業をやっている方につないでいただけ。あっという間に話がまとまって、サツマイモの収穫から火おこし、落ち葉での焼き芋体験をさせてもらいました。

秋葉 「焼き芋焼いてみたいんです」っていうのもびっくり相談だけど、自分で焼いた焼き芋は美味しかったですか。

大崎 めちゃめちゃ美味しかったです。自分は東京育ちなので、落ち葉を集めて焼き芋を焼くというのは、歌とかマンガの世界だったんです。それを実際にやることで、とても良い経験ができました。

安藤 それは素敵な経験をしたね。どんなことでもいい。チャレンジしたいと思ったら、まずは動いてみるのが大事なんです。若いうちは経験がないということが、逆に一番の強みになります。年を重ねて先が見えるようになってくると、経験が邪魔をして動けなくなってしまう。大崎さんの行動に移すまでのフットワークの軽さは、素晴らしいと思います。

大崎 ありがとうございます。焼き芋を食べながら、農家の方の農業への「思い」も知ることができました。起業して農家になった方だったので、起業の心構えや覚悟なども語っていただきました。今回は利益の出ないイベントとしての開催でしたが、そこからもう一度、自分がやってみたいことで利益を出せるものは何だろうと考え、今はボードゲームの製作に着手しています。

秋葉 そのアイデアも、焼き芋にチャレンジしたからこそ生まれてきた発想ですよね。何事もやってみないとわからないし、やってみることで、思わぬところにワクワクすることがあったりするんです。だからこそ、小さくてもいいからチャレンジしてほしい。そのための環境、チャンスをを用意するのがCSIなんですから、学生たちにはもっと気軽に相談に来てほしいと思います。

「どうせ」からは何も始まらない 動くことで見えてくるものが必ずある

安藤 日本人は本来とてもクリエイティブだし、社会貢献への意識もとても高いのに、自己肯定感が低いことから、やりたいことがあるのに「一步」を踏み出せない人が多いように感じます。けれどグローバル化した今の時代においては、そこを突き破って切り拓こうとする意志や、他人の目や意見に振り回されることなく、自分で考え、行動する力を持つことが重要になってきます。県大の学生たちには、そこをしっかりと考えてほしいと思っています。

秋葉 私が若い人たちと話していて一番気になるのは、「どうせ」という言葉です。「どうせ失敗するから」と動かなければ、失敗もないけれど成功ありません。「どうせ」からは何も始まらないんです。動いて失敗したら、そこから学べばいい。そも



CSIの使命

持続可能な社会の実現を目指し、ソーシャル・イノベーションを促進します。

CSIは、「社会課題を生まない」「社会課題を解決する」ことに理念を持つ人が、一步を踏み出せるシステムを醸成し、持続可能な社会の実現に挑戦しています。多様な立場の人々が絡み合う「オープン・イノベーション」を軸に、社会課題を解決するための新しい仕組みやサービス、商品等の開発を促進します。

社会的課題に取り組む事業者・創業者等を支援

地域の事業者と学生をつなぎ、社会人の大学へのアクセスを促進し、大学の知を地域に還元

大学内外の専門家による
コンサルティング

専門職・地域おこし協力隊・
女性若者起業塾

事業者などへの
オープン・イノベーション支援

イノベーションにつながる
ネットワーク創出

SDGs促進

審議会・企業研究などへ講師派遣
共同研究等の促進

知と実践の循環

大学教育との連携

地域におけるイノベーションの実像をロールモデルとして学生に提示し、次世代のイノベーターを養成

大学院生・学部生が
地域・社会と関わる機会

学生と県民が共に学ぶ
公開講座の開催

企業や行政と連携しながら
問題解決機会の創出
(Problem Based Learning)

創業者・経営者付き
「カバン持ち」挑戦の機会を創出

CSIへのアプローチ Ecosystem to challenge



CSIを含めた
挑戦するエコシステムへ
接続・サポート



「そも取り返しのつかない失敗なんて、ほとんどありません。人はよほどのことがない限り同じ失敗はしないし、失敗の経験を重ねていくうちに、見えてくるものが必ずあるんです。学生のうちに経験を積むことで、それを早く手にしてほしい。大人の顔色なんか窺わずに、CSIを上手に使ってどんどんチャレンジしてほしいと思います。」

行徳 私は今、3年生ですが、ちょうど新型コロナウイルスで入学式がなかった学年なんです。楽しみにしていた寮生活や海外プログラムもなくなってしまい、とても悲しかったことを覚えています。自分だけでなく、全国の大学生たち、さらに言えば学生だけでなくすべての人たちが、さまざまな思いで過ごしていました。そんな中で、いろいろな「思い」はあっても、なかなか「一歩」を踏み出す勇気が持てない学生も多いと思うんです。そんな学生が、CSIをもっと活用しようと思えるようになるには、どうしたらいいと思いますか。

秋葉 そうですね。今の3年生、2年生は、特に大きな影響を受けた学年ですよ。講義もリモートだったり、大学やCSIとの距離がなかなか近づけない状況もあったように思います。CSIでも、敷居が高いと感じている学生に少しでも身近に感じてもらえるよう、昼休みにも飛び込み相談ができる出張デスクを開いて工夫しています。でも一番は、CSIを上手に活用している学生たちの口コミかな。行徳さんも大崎さんも、CSIは使わないともったいないよって、もっとみんなに伝えてください。

大崎 自分のまわりにもいますが、明確な何かがまとまっていないとCSIに行けないと思っている学生が多いように思います。起業を考えていないとダメなんじゃないとか、社会的な意義のある活動じゃないといけないんじゃないとか。だから二の足を踏んでしまうんだと思います。

秋葉 そんなことないのに!「焼き芋を焼いてみたい」でも「あの人に会いたい」でもいい。「いろいろ考えているうちに何だかわからなくなっちゃったから話を聞いてほしい」でもいいんです。CSIにアクセスすることで、その「思い」を一緒に考えてくれる人につなぐのがCSIの役割です。CSIという組織が持つコネクション、人脈を最大限に使って、自分の願いを叶えてほしい。チャンスをつかんでほしいんです。

安藤 東京などの大都市にある大きな大学は、学生の数も膨大で、一人ひとりの学生をサポートするCSIのような組織はほとんどありません。皆さんのすぐそばに、いつでも門戸を開いて、あなたのチャレンジを待っている人がいるということを忘れないでほしいですね。

長野から新たなイノベーションを起こす人材を育てていきたい

大崎 僕は逆に思い立ったらすぐCSIに相談に行っていたので、これでいいんだと言われて、ちょっとほっとしているところです。これからも、ガンガン相談に行きたいと思います!

行徳 私も、CSIがあることで自分の学生生活の幅は確実に広がっていると感じます。安藤理事長は、なぜ長野県立大学にCSIを設立したのですか。長野県立大学として目指すべきものは何なのでしょうか。



公立大学法人 長野県立大学
安藤 国威 理事長

安藤 私は教育畑の人間ではなく、ずっとグローバル企業の企業人として働いてきました。そこで実感したのが、必要とされる人材、求められている人材と、日本の大学教育とのギャップです。グローバルな企業というのは、常にイノベーションを起こさないと淘汰されてしまう。自分の意見を持って、新しいアイデアを発信できる人が必要とされているのに、挑戦しようとする人が少なくなっていることに危機感を覚えました。であるならば、個々の持つ資質、個性を伸ばす大学こそが今、必要とされ



ソーシャル・イノベーション創出センター
秋葉 芳江 センター長

ているのではないかと。アントレプレナーとして新しいイノベーションを起こそうとするマインドを持った若者を育てることが、今の大学教育に最も必要なことだという信念を抱き、長野県立大学の開学に携わらせてもらいました。

秋葉 少人数制や、1年次全寮制、海外プログラム、さまざまなセンターの設置など、長野県立大学を構成するシステムは、アントレプレナーの育成につながります。CSIは特に強くアントレプレナー育成を意識しています。起業する、しないではなく、そういう思考、精神を持って地域に貢献できる人材、グローバルに活躍できる人材を育てたいと思っていますし、その芽は出始めていると感じています。

大崎 なるほど。つまりアントレプレナーシップを持った人材を輩出しないとやばいと思った大人たちが作った大学なんですね。

秋葉 そう言えますね。そして私は、安藤理事長の思いに共感したからこそ、今ここで、CSIに関わっているわけです。

安藤 秋葉センター長や大室教授など、先駆的な経験を積んだ方が長野県立大学に集まってくださったことに感謝しています。だからこそ、学生たちにはもっと長野県立大学を、CSIを活かしてほしい。「攻める大学」を掲げた県大の学生に求められるものはなにかを、考えてほしいと思います。また、大学が長野という地方都市にあることにも大きな意義があります。私は地方にこそフロンティアがあると常々言っています。今はどこにいても、ボタンひとつで世界とつながれる時代です。豊かな自然に恵まれた長野で、快適なライフスタイルを楽しみながら柔軟な発想で新しいことにチャレンジしていく。そんな学生生活って最高じゃないですか。

行徳 私は長野はとても素敵なおところだと思います。王滝村は、長野市よりもさらに自然が豊かで驚きました。

安藤 いいですね。都会で育った人が地方に来て、さらに地方の中でも小さな村で学びを活かしてチャレンジしている。大崎くんも東京からだといっていたね。いろいろな地域から長野県立大学に集まってきてくれるのは嬉しいことです。

大崎 僕は、「東京」と「地方」が違うってということが、よくわからなかったんです。地方に住んだことがないから、地方を体験してみたい、地方を感じてみたいと思って長野県立大学にきました。

秋葉 すてきな視点ですね。だから焼き芋体験っていう発想が出てくるのかもね。CSIもサポートしますので、これからもっと柔軟なアイデアで、いろいろなことにチャレンジしてってください。

大崎 はい、どんどん活用します!

アイデアを後押しする「理事長裁量経費採択事業」制度を活かして

行徳 CSIを活用するきっかけのひとつとして、「理事長裁量経費」制度がありますが、これはどういった意図で始められたのですか。

秋葉 「理事長裁量経費」にエントリーしたいといってCSIに相談にくる学生は多いですね。この制度は全学の制度で、自分のアイデアやチャレンジしたいことを理事長にプレゼンテーションして、採択されると必要経費を出してもらえる制度です。金額の上限はありますが、個人に対してリアルにお金が出るので、その予算を使って自分がやってみたいことに挑戦することができます。CSIでは、チャレンジの結果ではなく、経験そのものを重視して支援しています。「やってみる」という学びに投資していると言えますね。ですから結果よりも、そこから学んだこと、次のステップに活かせるかどうか、ということが重要です。このような全学制度がある大学は少な

と思いますし、長野県立大学が誇る、素晴らしい制度のひとつだと思います。

安藤 例えば学生たちが「話を聞いてみたい」という思いから始まったオンラインイベントがあります。台湾のIT担当大臣であるオードリー・タン氏のライブ配信イベントに参加した学生たちが、「世界の人の話を聞きたい」と、企画からゲストの選定、出演調整、フライヤーの制作や当日の進行まで取り仕切りました。ニュージーランドの国会議員であるメリッサ・リー氏や、MADプログラム・ディレクターでありAIT副ディレクターのロジャー・マクドナルド氏など、5名のゲストを迎えた「UNMUTE YOURSELF ～「グローバル」サイコウ?」は、学生たちにとって非常に良い経験になったと思います。このようなイベントを開催する際、ゲストへの謝礼や広報費などを自ら出資することは難しいですが、理事長裁量経費を活用して実現することができました。イベントを通して学生たちが学んだことは、必ず次のチャレンジの糧になると思います。

秋葉 あれは1年生が企画したんですよね。1年次から動いたということに、大きな意義があると思います。やりたいと思う、挑戦する、失敗する、学ぶ、そしてまた挑戦する。そういった経験サイクルを1年次から高速で繰り返してほしいと思います。やりたいことをサポートするために私たちCSIがあり、相談にのり、具現化につながる人脈をコーディネートすることができます。だからこそ、まずは「やりたい」という意思をオープンにしてほしい。それを多様な視点で一緒に考え、実現することこそ、オープン・イノベーションなんです。

行徳 自分の中にある「やりたいこと」を見つけることが大事なんですね。私は、やってみたいことはいっぱいあるんですが、それがどこまで本当に「やりたいこと」なのかわからなくなることもあります。

安藤 私はソニーでVAIOというパソコンビジネスの立ち上げにゼロから携わったんですが、ITの専門知識は殆どなく、完全なる素人でした。でも素人だからこそ、「使いやすいパソコンがあったらいいな、軽くて、持って歩くことがかっこいいと思えるようなパソコンが欲しいな」と思ったんです。当時はパソコンといえば黒やグレーばかりだったので、綺麗なバイオレットに仕上げてロゴを大きく配置したデザインを展開したところ、あっという間に市場に認知されました。もちろんパソコンとしてのスペックがしっかりしていたからこそですけどね。「こういうものが欲しい、こういうことをやりたい」という思いは、時に専門家からは否定されることもあります。でも視点が違うからこそ、プラスに働くこともある。「やりたいこと」の精度は、「やってみる」ことで判断できるので、最初から否定する必要はないと思います。

秋葉 VAIO、よく覚えています。大人気で、デスクに置くのが憧れでした。

安藤 似たものを作るのではなく、他の人がやらないものを作る。世の中にないものを作ることの意味を、ソニー時代に学んだように思います。長野県立大学も、世の中にない大学をという思いで、いろんな視点で考え、作った大学です。だからどんどん「やりたいこと」に挑戦してください。

地域の温かな思いを大切に
自分を信じてもっと自由に動き出そう

大崎 秋葉センター長から見た、県大生の課題はありますか。いつも発破をかけてもらっていますが、もっとこうしろよ、みたいな。

秋葉 学生一人ひとりに考えがあり、育ってきた環境や置かれている状況も違うのでひとくくりにはできないですが、ひとつ言うとしたら、「もっと挑戦しようよ」かな。ルールを守らなくていいということではなく、もっと“やんちゃ”でいい。だって



グローバルマネジメント学部3年
行徳 ゆりな さん

学生時代だからできることってあるんですよ。でもみんな真面目だから、先に頭で考えてしまって結局動かない。ネットで調べたりYouTubeで見たりして、やった気、知った気になっちゃっている。そうじゃなくて、リアルで経験してほしいんです。やりたいことがあったら、アクションを起こしてほしい。これまでたしかにコロナ禍で動きにくいことも多々ありましたが、これからは、この3年分を取り戻すくらいのパワーでみんなにチャレンジしてもらいたいですね。

安藤 そうですね。長野県立大学は、開かれた大学として町も大学のキャンパスと捉えていますので、ぜひ地域に飛び出してほしいと思います。

秋葉 ありがたいことに長野県内では、長野県立大学を地域の皆さんが温かく見守ってくれています。私もさまざまな場面で地域に出ていくことがあります。皆さん、本当に優しい。学生がこんなことをやってみたいと言っているんですが、とお話を持っていくと、「県大生がやりたいって言っているなら協力するよ」と言ってくださる方も多いです。この恵まれた環境に感謝して、どんどん地域と関わってほしいですね。



グローバルマネジメント学部1年
大崎 琉雅 さん

行徳 私も実際に体験して、地域の皆さんの温かさを実感しています。安藤理事長は、学生に求めること、期待することはありますか。

安藤 学生の皆さんには、もっと社会に対して関心を持ってほしいですね。自分のまわりの小さな世界だけでなく、もっと世界、社会を広い視点で見てほしいんです。今は未来が予測できない時代です。だからこそ、自分の指針になるものを持って生きていかないといけない。それには経験を積みしかありません。

行徳 さっきから、安藤理事長も秋葉センター長も、すごく楽しそうに笑顔でお話しされていて私も元気をもらっていますが、失敗しても次へ行ける力って、どこから湧いてくるのでしょうか。

安藤 うーん。今までいろいろチャレンジしてきたけど、やっぱり達成感かな。満足感ともいえるね。何かを達成して、自分が成長できたと思えた時の「喜び」という経験があるから、失敗したとしても、じゃあ次って思えるんだろうね。

秋葉 「チャレンジ」というと、ものすごく大きな目標を立てなきゃいけないとか、頑張れと強いられているみたいだと感じる学生もいると聞きますが、そんな大きなことじゃなくてもいいんです。例えば学校に行く道順を毎日変えてみるというだけでも、わくわくする新しい発見があるかもしれません。そこに「やってみたい」と思える種が見つかったら、CSIに来てください。その種が芽を出すにはどんな水が必要なのか、花を咲かせるために必要な肥料は何なのか、一緒に考えましょう。若さには無限の可能性があるのだから、失敗だって肥料になるんです。

安藤 今の学生さんたちは、社会的な課題に敏感ですし、SNS等を通じて世界とつながっています。従来の利益追求や規模の拡大を重視した価値観よりも、よっぽど進化しています。今の自分の価値観を、もっと信じてください。

秋葉 どんなチャレンジも、そのプロセスはハッピーであり、どんな結果も次の一歩につながります。だから、自分が何かをすることで未来は変わるんだと信じてください。「自分の手で未来は変えられる」と信じることから、最初の一步は始まります。

行徳・大崎 そう言ってもらえると、なんだか急に動き出したいなくなってきました。またCSIに相談に行きます。今日は貴重なお話を聞けて、とても楽しかったです。ありがとうございました。

2023年1月23日 長野県立大学内にて開催
撮影のため一時的にマスクをはずしています

産官民学の連携



「なぜ勉強するのか?」という問いについて、社会人・大学生を交えたグループワーク。対話の内容は、高校生が発表し全体で共有。



身体性思考のワークショップ。神経生理学等の理論を学んだ後の実践(ボディーワーク)の様子。



第2回ラーニング・ジャーニー ㈱JBNにて「第1部 訪問企業を知る」

JIBUN発 旅するラボ2022 (Jラボ2022)*

*長野県立大学、KDDI株式会社、長野県教育委員会の包括連携協定締結を契機に、長野県中小企業家同友会を加えた4者で主催

この企画は、「高校生が、大学生や企業経営者等の社会人との交流を図り、身近な事柄から自ら立てた問いを自ら考える探究を通して、自分が何者であり、何を実現したいのかを明らかにする」ことを目的に実施しています。今年度は県内各地から18名の高校生が参加し、様々な場所で多様な考えに触れながら「自分発の問い」を深めています。

キックオフキャンプでは、長野県立大学大学院ソーシャル・イノベーション研究科のご協力のもと、思考体験ワークショップ(セルフマネジメント、システム思考、身体性思考、アート思考)で、従来の思考に捉われない考え方や方法論を体験しました。大学生による問いのワークでは、「なぜ勉強するのか?」という問いについて、社会人を交えて対話し、Jラボの楽しみ方を感じながら、1年を共にする仲間と相互理解を図りました。

サマーキャンプでは、高校生が問いを発表し、対話を通してなぜその問いに興味があるのかを深掘りしました。神戸和佳子先生(ソーシャル・イノベーション研究科講師)の『『問い』が生まれるとき』をテーマとしたワークショップでは、問いのレクチャーやワーク等を通して、「自分ごと」として考えたい問いについて考え、神戸先生から参加者全員の問いに対してフィードバックをいただきました。

第2回ラーニング・ジャーニーでは、長野県中小企業家同友会会員企業の株式会社JBN(長野市・室賀英二代表取締役社長)にご協力いただき、社長自ら、ライフヒストリーや会社経営、社会への問題意識を語っていただきました。全員で社長への問いを出し合い、対話を通して、自分の問いと今日の体験との紐づけを行いました。

2023年も続くJラボ。今後もアップデートしながら、生徒にとっても大人にとっても「自分を探究する旅」を続けていきます。

(長野県教育委員会学びの改革支援課 前山和志さん)

[Jラボ2022概要]

日程	企画	主な内容
5/29	キックオフキャンプ	□長野県立大学大学院の客員准教授(若宮和男先生、福谷彰鴻先生、藤本靖先生、稲垣聡一郎先生)による思考体験ワークショップ □大学生による問いのワーク、チームビルディング
通年	オンライン部活	□高校生・大学生・社会人5〜6人のユニットごとの定期的なコミュニケーションスペース □活動の振り返り、日頃のモヤモヤを多様な先輩たちと語り合う
6/25	ラーニング・ジャーニー①	□県内で活躍する経営者を訪ね、ストーリーを聞き、その体験を個人やグループで深掘り □㈱アディシグロ(長野市) / ㈱アースシステム(松本市)
8/6	サマーキャンプ	□問いの発表、参加者からのフィードバック □神戸和佳子先生(ソーシャル・イノベーション研究科大学院講師)の『『問い』が生まれるとき』ワークショップ
9/3	問いの中間レビュー	□対話を通して問いのレビュー
10/29	ラーニング・ジャーニー②	□訪問場所: ㈱JBN(長野市)
12/3	問いのブラッシュアップ会	□対話を通して問いをブラッシュアップ
1/21	ラーニング・ジャーニー③	□訪問場所: ㈱牛越製作所(岡谷市)
3/11	スプリングキャンプ	□自分の問いに対する答えを自分なりに論理的に述べる

高校生の感想から

キックオフキャンプ

- 正解はない。どんなことでもその人の感じ方で違ってくる。枠から外れることを楽しめるような言葉に安心した。
- 自分の好きを相手に熱意を持って論理的に説明することが大切だと学べたので、常に理由探しをしたい。

サマーキャンプ

- 自分の問いに関するanswerを聞いて、「あーその見方もあったか」と。自分の主観でしか見られなかったので、客観的な視点からのフィードバックを受けて、とても新しい自分になった。
- 一つの問いから色々な考え方が出てきて面白かった。自分が興味を持っている分野から問いを立てるのが楽しい!

ラーニング・ジャーニー

- 縁の下で力持ちの企業が多く驚いた。その仕事を熱意を持ってしていることがすごいと感じた。見えているものしか見えてないとすごく感じたので、もっと色々なものに目を向けなければならないと感じた。
- 長野という地域の特徴や魅力をまだまだ知らない自分。まだ長野にはたくさんの魅力がある。知り尽くするのが難しいほどたくさん! 地域の特性も含めた魅力を知っていきたい。

飯山グッドビジネスラボ(令和4年度)

「飯山グッドビジネスラボ(以下GBL)」は、社会性があり、環境に配慮した、次世代や未来にも良いビジネス(=Good Business)を体現しようとする事業者を応援するために、2019年から始まった実験の場です。飯山市が長野県立大学と2018年9月に締結した包括連携協定に基づき、地域課題をビジネス手法で解決することに、市内外の多様なセクターが事業連携の可能性を模索してきました。一般社団法人リリースは、やりたいことに寄り添う個別の事業相談や参加者同士のミーティングの場を企画・運営しながら、地域に歓迎されるビジネスの小さな実験や各自の願いが重なるようなアイデアを形にしていって伴走支援を行ってきました。

とくに令和4年度は、GBLを通して各自が事業を再定義できた先に「飯山がもっと元気になるにはどうしたらいいか?」という問いが自然と育まれ、協働プロジェクトや事業連携の可能性がいくつも立ち上がりました。

GBLでは日頃話されないような「事業や地域への思いと新たな気づき」が溢れる時間になるのですが、昨年夏の全体ミーティングにおいて、「雪が巡る。カンパニー」というコピーが生まれたことは一つのターニングポイントでした。寒暖の差が大きく、四季の変化が鮮やかな飯山の自然のサイクルの中で、雪という“資源”を活かした観光やアクティビティ、雪解け水の恵みを得た豊かな土壌で大切に作られた農作物やお酒、そんな飯山の環境や自然に魅せられた移住者が育てている古民家コミュニティなどの各事業を包摂するコンセプトは、訪れる人に飯山全体を巡ってもらい、五感で体験できる新たな魅力を発信するための“共通の枠組みでありメッセージ”です。

今後はGBLに参加していなかった事業者の方や他の地域とも交流や連携が生まれ、また、訪れる人も観光や作物を一過性で消費するだけの立場ではなく、体験を楽しみながらともに飯山の資源を増やし合える“共創的なファン・コミュニティ”ができることを期待しています。それは私たちが日本や世界各地に見出しているCommunity Based Economyの一つのモデル経済圏となる可能性を感じているからです。

(一般社団法人リリース プロジェクトコーディネーター・リサーチャー 井上良子さん)





あげまつで暮らしを実験する

2017年に木工の東大上松技術専門校への入校をきっかけに上松町に移住し、地域おこし協力隊を経て今年で移住6年目になりました。その活動の中で、多くの大学生や若者と上松町の関わりが生まれてきました。大学のない木曽地域にとって、地域の外から彼らのような若い世代が町に訪れてくれることは非常に価値のあることです。そんな彼らにとっても、上松に来ることで何か得るものがあったり、価値観の変わるきっかけになるような地域でありたいと思ってきました。そこで、そんな若者たちが「自分の人生を自分でつくる」ことができる地域、そのきっかけに出逢える地域にしていきたいために、上松町での暮らしや生きるを一緒に実験する『AGEMATSU LIVING Laboratory (アゲマツリビングラボラトリー)』を設立しました。

今年は「大学生のためのシェアハウスの整備」と「木曽アロマのイベント出店」に取り組み、どちらにも県内外の大学生が参加してくれました。

シェアハウスは、週末や長期休みに上松町でフィールドワークやプロジェクトなどに取り組む大学生が滞在し、地域との交流を持てるような拠点とするために整備しています。シェアハウスとなる小さな空き家は、地域の方から活用方法について相談いただいたものです。大学生の「上松町に気軽に泊まれて滞在できる場があれば、もっと町に関われるのに」という声から始まったアイデアが、地域の方の課題解決と組み合わせあって形になっていくのは、とても素敵なことだと思っています。

また、上松町にある木曽ひのきの精油・蒸留水といった素材から生み出した新しいプロダクトをPRするために、長野県立大学の学生のお手伝いをいただきながら静岡のマーケットイベントに参加してきました。試行錯誤のイベント出店でしたが、参加メンバーみんなでアイデアを出しながらディスプレイしたり、商品を見てくれるお客さんに木曽の魅力をプレゼンしたり、みんな楽しみながら参加してもらえたと思います。

これからも、「上松町と関わらなかったらこんな経験できなかったなあ」と思えるような経験の場を提供しながら、楽しく生きることを実験していきたいと思っています。

(合同会社AGEMATSU LIVING Laboratory代表社員／上松町地域コーディネーター 小林信彦さん)



● 太田琉暉さん ●

私は小林さんにお声掛けいただき、小林さんが現在行っているリノベーションに関わらせていただいています。その中で上松町の方や他地域の方との関わりができ、地域おこし協力隊や上松の木工に興味を持つきっかけになりました。今後も上松町を中心とした人との関わりを重視しながら関わらせていただきたいと感じています。

ひろがれ! 推し村プロジェクト 王滝村

包括連携協定を結んだ王滝村では、今年度9名の学生が3つのチームになって地域活性化や自己発見に挑戦する活動をしています。コロナ禍の影響で突然の予定変更が起きてしまい、「2週間の団体滞在」から、「週末や祝日はさんでの短期分散滞在」を数か月にわけて行っている「ひろがれ!推し村プロジェクト」。ここまでを振り返ってもらい、体験して感じたことを学生の皆さんにまとめてもらいました。

今思えば、夏休み2週間の長期滞在をコロナで断念し、チームごとの短期滞在に切り替えたのが、大きな出来事でした。チームごとに滞在の時期をずらしたことで、王滝の印象の違いやチームの性格が表れ、チームの色が濃いプロジェクトになったからです。

他チームとの共有の場面では、チーム間でのギャップを強く感じました。推し活チームは村民とざっくばらんに話す「語る会」を開き、村内での課題も見つけていました。映像チームは、撮影で訪れた王滝の観光名所の魅力、自然の雄大さを語ってくれました。村内のイベントで人と関わり一緒に楽しむ機会が多かったファンチームにとって、どちらも知ることができなかった一面です。王滝で関わった人、体験したことがチームごとに異なることで、それぞれがより多様な印象を抱いていました。他のチームを通して新しい王滝を知ったような感覚でした。

一方で、チームを超えてみんなが感じていた王滝の良さもありました。それは、「生きている実感」です。狩猟で捕まえたイノシシを捌いて食べさせてもらったエピソード、王滝の人から感じる実家のような安心感、日常から離れてのんびりしているとき、“なつかしい”、“あったかい”と感じたときなど文脈は様々でしたが、みんなが王滝のどこかで「生きている実感」を持っていました。また、“少人数”で“なにもない”村だからこそ、やりたいことができたと感じたメンバーも多くいました。村民の方々にとって何でもないこと、課題に感じていることが、外から来た私たちにとっては王滝の魅力として映る、という村内と村外のギャップも滞在を通しての大きな発見でした。

最後に、王滝で私たちをサポートしてくれた、倉橋さん、杉野さんへの感謝や感銘もメンバー内で共通の思いです。「村民の方々と私たちをつなげてくれた」と多くのメンバーが口を揃えていました。本当にありがとうございます。

(会田拓馬さん／池田百花さん／太田琉暉さん／小口紗季さん／行徳ゆりなさん／穂苅真衣さん／宮原華菜子さん／宮原晴香さん／矢野叶羽さん)



● 胡桃澤 尚乃さん (普寛堂 くるみ沢旅館) ●

王滝の魅力を探るため、村内を歩き回り、行事に参加し、村民の話に真摯に耳を傾け、考える姿は、村民の楽しみになり、また子供たちの憧れになったと思います。皆さんの活動の今後の展開にワクワクしています。

長野県立大学がこれまでに締結した協定一覧 (2023.2.28現在)

No.	締結年月日	締結先	協定の種類
1	2018. 7.10	長野市	包括連携協定ほか
2	2018. 9.11	飯山市	包括連携協定
3	2018.10. 5	千曲市	包括連携協定
4	2019. 2. 5	長野県 BIPROGY(株) (旧社名: 日本ユニシス(株))	ソーシャル・イノベーションに関する連携協定
5	2019. 3.15	中野市	包括連携協定
6	2019. 6. 4	須坂市	包括連携協定

No.	締結年月日	締結先	協定の種類
7	2019. 11. 8	KDDI(株) (一社) 長野ITコラボレーションプラットフォーム (NICOLLAP)	包括連携協定
8	2020. 1.31	(独) 国立高等専門学校機構長野工業高等専門学校 (長野高専)	包括連携協定
9	2020. 8. 4	長野県教育委員会 KDDI(株)	包括連携協定
10	2022. 3.29	国立大学法人信州大学	包括的連携協定
11	2022. 5.27	王滝村	包括連携協定

地域で活躍する 学生たち

CSIは、学生の地域との連携支援を積極的に行っています。
楽しみながら地域とつながり、可能性を広げていく。
そんな学生が何に取り組んでいるのか。活動を紹介してもらいました。



食健康学科1年

宮岡 万優莉さん

入学してから多くの方との素敵な出会いの中で、様々なチャンス을いただき、多くのことにチャレンジしてきました。同じ学科の友人と地域のイベントでお菓子の販売をさせていただいたり、地域のお店“シンカイ”で、日曜モーニングの提供、12/23にはクリスマスに合わせたフードメニュー提供したりしました。この1年間で多くの貴重な経験をさせていただきました。今後は自分でお菓子を製造し、店舗に置かせていただくなど、活動の場を増やしていくことが目標です。

#食

#多くの方との素敵な出会いに感謝

#好きを形に!



グローバル
マネジメント学科1年

大崎 琉雅さん

Growth Seeding Bloomの社長である松葉陽祐さんと一緒にサツマイモを収穫し、それをその場で焼き芋にしました。行き当たりばったりで始めましたが、松葉さんとの起業や考え方についての対話、火おこしなど、とても楽しく実りのあるものになりました!次回はバーベキューでもどう?とご提案いただいているので、希望者多数なら…?

#秋の焼き芋

#産地超直送

#農業なのに福祉?!



グローバルマネジメント学科1年

栞原 吏玖さん

— UNion —

長野の古き良きまちの魅力がより発信されることを目的として、SNSの使い方で困っているお店に伺い、簡単にやり方をレクチャーするという活動を行っています。来年度は、つながりができたお店さんを載せた観光パンフレットの作成に取り組みます。

#SNS

#創作の喜びを

#なにかに挑戦したい学生へ



グローバルマネジメント学科2年

宮原 華菜子さん

— 鬼無里プロジェクトサークル きなさっぷー —

長野市鬼無里地区において、高齢化により衰退していた首都圏中学生に対する民泊活動を再興するため、多くの方々の協力を得ながら民泊の支援活動を昨年度から行っています。今後は民泊活動に対象を絞らず、さらに主体的に活動していきます。鬼無里の方々との楽しい時間と空間をたくさん作り上げていきたいです!

#鬼無里

#第二の故郷

#楽しく進もう



グローバルマネジメント学科2年

小宮山 文登さん

— Stowly Marche —

チャレンジしたい人のプラットフォーム、街の中の心地の良い場所を創り出すためマーケットイベントを主催しています。今年度は、商店会さん、地元の企業さん、長野市さん、ながの灯明まつりさんの協力で、6回開催することができました。たくさんの人の笑顔をリアルで見ることができるイベント運営は、とてもやりがいがあります。

#まちとひと

#心地の良い場所

#チャレンジ



グローバルマネジメント学科2年

矢野 叶羽 さん

長野の門前のカフェや『シンカイ』で定期的に多くの人と関わりを持つようにしています。参加したイベントなどの場から新たなつながりが生まれることもしばしばあります。来年度はそのつながりを活かしてナナメの関係が生まれる場を多くの人に届けていきたいです！

#ナナメの関係
#場
#長野で生きる



グローバルマネジメント学科2年

矢澤 ひな子 さん

ーアフターガールズー

地元である長野県の最南端、飯田下伊那地域の魅力を高校の友人とInstagramで発信しています。正直、知名度はまだ低いですが、しかしそれを逆手にとって、知られていない新たな魅力を発掘し、私たち目線で地域活性化に取り組んでいます。現在は企業や観光協会の方と協力して、動画制作やフォローさんと交流できる企画を行っています。

#飯田下伊那
#「何もない」を覆す
#私たちの地元愛を全国に



グローバルマネジメント学科3年

森 彩華 さん

象山寮の近くにあるR-DEPOTにて活動しています。R-DEPOTを拠点として、人と地域を繋げる役割に関わっています。1階にあるカフェで接客を行う傍ら、長野市の魅力を伝える方法を模索しています。最近ではイベントの開催も増えており、地域と人の距離が近くなっている様子を感じる機会が多くなってきました。ぜひ、一度足を運んでみてください。

#古道具
#まちづかい
#空き家

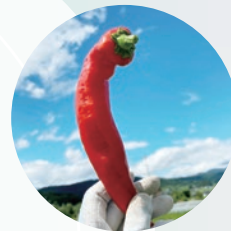


グローバルマネジメント学科3年

長谷川 真希 さん

夏休みに合同会社キキさんが行っていた実践型インターンシップで、八幡屋礒五郎さんに1ヶ月間インターンをしました。インターンを通して地元の方から愛される力や、お土産として選ばれるためのきめ細かな心配りを間近で体験できました。地域で働くことの難しさやかっこよさを体感し、就職活動において視野を広げる大きなきっかけとなりました。

#地域実践型インターンシップ
#五感でたのしむ小さなしあわせ
#ナガノいいまち



グローバルマネジメント学科3年

南井 賢大 さん

夏に行われた地域実践型インターンシップというプロジェクトに参加し、合同会社U.I.international様の下で、活動を行いました。インターンの中では、耕作放棄地で栽培されたポップコーンを利用した商品開発を行い、実際に企画した商品が販売されています。私は常日頃から意識高く活動をしているわけではなく、自分のやれることをやりたいときにやってあげたい人のために活動していて、現在も自分のできることをする中で、いろいろな方、いろいろなものと関わって毎日楽しく生きています。マイペース最高です。

#マイペース #ポップコーン男
#とにかく人と関わりたい



グローバルマネジメント学科4年

青木 菜々恵 さん

ー織り成す軽井沢ー

中軽井沢で中高大学生・社会人が交流する3日間のワークショップを実施しました。その地域になかった新しい人の流れと出会いが起こす、未知の化学反応が面白い(^^)／

#持続可能性
#アート思考
#新しい人の流れ



グローバルマネジメント学科4年

宮本 優 さん

株式会社森の環と合同で、「花卉茸認知度向上プロジェクト」を行っています。プロジェクトの一環として、森の環ご協力のもと、大学で「花卉茸」と「花びら茸のおみそ汁」を無料配布しました。たった一日で、用意した商品計200個を配り切るなど、大変大きな反響をいただきました。実際のキノコ栽培工場見学や商品のプロモーション活動を勉強させていただき、大学の授業では学べない貴重な経験ができています。

#花卉茸 #花卉茸認知度向上プロジェクト
#株式会社森の環とのコラボ



公開講座

CSI公開講座は、学生も参加し、地域の皆さんとともに未来を考える学びの場。今年度はオンラインに加え、対面実施やオンラインと対面のハイブリッド実施もしました。参加者の皆様の感想とともに紹介いたします。



地域を元気にするファンド～信州SSファンドスタート～



実施日 ▶ 2022年5月25日
ゲスト ▶ 松本直人さん
(フューチャーベンチャーキャピタル株式会社 代表取締役社長)
ベンチャーキャピタルについて知識を深めたい方や起業を志す方、さらには学生起業家の参加も見られたのが特徴的でした。

受講者の声

ファンド=自分には縁の遠いものと思っていましたが、かなりイメージが変わりました。うちもそうですが家業をやっている人は、こういうところに相談しないで勝手に困っている人が多いのかもしれないと思いました。伴走支援は大事ですね。

こたえは大学の外にもある!? 自分のやりたいことの探し方



実施日 ▶ 2022年6月13日
ゲスト ▶ 志賀アリカさん(小布施町図書館長)、藤原正賢さん・北埜航太さん(CSI地域コーディネーター)
これから何かの活動をしたいと考えている大学生・高校生を中心に様々な方が参加。教育に関わる社会人の方の姿もありました。

受講者の声

自分のやりたいことを考えるのによく一人で閉じこもって考えるのですが、自分では考えきれないと割り切り、人と会ったり、活動に参加したりするような人との交流が結果的に良い影響をもたらすことが分かりました。

公民連携のはじめの一步とは?



実施日 ▶ 2022年8月8日
ゲスト ▶ 赤羽孝太さん(一般社団法人Oと編集社代表理事、辰野町)、瀧内貫さん(一般社団法人ローカルイノベーションイニシアチブ共同代表、長野市)、古畑久哉さん(塩尻市役所産業振興事業部長、塩尻市)
地域での新しい挑戦について、県内で公民連携の現場事情に精通するお三方からのお話。

受講者の声

官民連携における民間側のスタンスを知ることができてよかった。登壇者3名それぞれ特徴的な取り組みをしていたため、それぞれ異なる視点から公民連携について話を聞けてよかった。

知っておきたい! VRと学び



実施日 ▶ 2022年9月28日
ゲスト ▶ 矢野浩二朗さん
(大阪工業大学 情報科学部 准教授)
具体的な機材やメタバースで可能なアクティビティなど盛り沢山でお話いただきました。また、留学が難しい中で、の本学グローバルセンターの取り組みも共有されました。

受講者の声

VRの教育への関わり方・活用について具体例や身近な活用例を知ることができ、自分の中でハードルが下がり印象が変わった。

好きからはじめる自分のやりたいことの探し方



実施日 ▶ 2022年10月5日
ゲスト ▶ 川向思季さん・小宮山文登さん(合同会社キキ)

学生がワークショップを通して自分の好きなことと興味・関心について考えたり、興味・関心について話を聞きいろんな学生と出会う場。新しいプロジェクトの種が生まれました。

受講者の声

大きい目標を持っていて不安などが少しあったが、交流を通して行動する意欲が湧いた。自分の得意を生かしてぜひ参加してみたいと思った。ネットショップや学園祭での出店など小さなことから始めてみたいと思った。

経営者トークライブ「100事業100幹部への挑戦と失敗」



実施日 ▶ 2022年10月28日
ゲスト ▶ 高橋聡さん
(アスク工業株式会社代表取締役/株式会社トランビ取締役創業者)
前半は終始明るい雰囲気の中で挑戦と失敗の様子が語られ、後半の「妄想会議」では初めて会った参加者の間で理想の街について活発に意見が交わされました。

受講者の声

失敗を恐れずにチャレンジできる風土と失敗を許容する風土に人が集まり、人を育て、新たなビジネスが生まれる好循環を起こすと感じました。その風土は、日々の雑談や談笑によるものであり、つまるところ、心の通ったコミュニケーションなのだろうと感じた。

バッグ1つでパリに渡った若者がトップパティシエになるまで



実施日 ▶ 2022年11月25日
ゲスト ▶ 青木定治さん(パティスリー・サダハル・アオキ・パリ シェフパティシエ) フォトリター ▶ 藤原里瑛さん(NHKテレビ信州アナウンサー)
フランスを拠点に海外で20年以上活躍してきたゲストがどのように文化の壁を越え、課題をクリアしてきたのか。長野県への熱い思いも語られ、熱い意見交換も行われました。

受講者の声

青木さんの積極的な姿勢が一流のパティシエをつくったのだと、大変感動しました。リアルな講演はやはり迫力がありました。

人と組織が動き出すカギ―ソース原理の基礎とディール組織との関係―



実施日 ▶ 2022年12月7日
ゲスト ▶ 嘉村賢州さん
(東京工業大学リーダーシップ教育院特任准教授)
「ソース原理」「ティール組織」の関連、クリエイティブな組織のありかたなど。意見共有や、質疑応答を行い、組織について考えを深める時間となりました。

受講者の声

ティール組織への理解も深まりました。ビジョンの中にとどまる、というポイントが一番刺さりました。学びと実世界が直で繋がる稀有な例の一つかなと感じた次第です。学生さんたちの質問が素晴らしかったです。

中小企業のSDGs 未来志向と今できること



実施日 ▶ 2023年1月25日
スピーカー ▶ 秋葉芳江(ソーシャル・イノベーション研究科・グローバルマネジメント学部 教授、ソーシャル・イノベーション創出センター長)
事例紹介 ▶ 高木亜矢子さん(高木建設株式会社 常務取締役)
県内におけるSDGs浸透に関する概況を振り返り、特に浸透が課題とされてきた「中小企業における実際の取り組み」を詳しく紹介しました。

受講者の声

長野県にこれだけSDGsに取り組む企業があるのを知らなかったですし、取り組みも非常に面白かったです。

旅と出会いからはじめる「豊かさ」との向き合い方



実施日 ▶ 2023年2月3日
ゲスト ▶ 齊藤祐輔さん
(NPO法人 底上げ副理事長)
最近の幸せについての研究や幸せと豊かさの違いなどについて、問いを使って深く掘り下げました。

受講者の声

豊かさに関して、最近考えることが多かったので共感する部分や納得する部分、「そうなんだ」と思う部分色々あって楽しかったです。初めてお会いする社会人の方々とも豊かさについて話すことができてよかったです。



ゼミとのとりくみ

今年度の特徴の一つとして、ゼミ活動で地域とのつながりが増えたということが挙げられます。本学教員の声をピックアップして紹介します。

宮崎ゼミ

「健康社会」の実現に向けた取り組み

宮崎 紀枝 (グローバルマネジメント学部 教授)



宮崎ゼミでは、「健康」をテーマに他職種・他機関と連携した学びをしています。これまで学生の関心に合わせ「ユーモアと健康」「認知症サポーター養成」「メイクの心理的効果」「カウンセリング」「運動と健康」等、他職種を授業にお招きしました。

自治体との連携では、長野県のACEプロジェクトへ新提案を毎年実施しています。「学生向け健康授業シラバス」「ACE弁当普及のための調査や流通」「七二会地区活性化や魅力発信のアイデア」等で、一部実現しています。また、長野市連携事業である「若者のゲートキーパー養成講座」は信州大学の協力を得て市内に拡大中です。

企業との連携では、今年はじめて中部電力パワーグリッド株式会社の方を招き、企業の技術で地域の健康に何かできることはないか、皆で考える機会を持ちました。机上の学びと異なり、学生たちは「健康社会」をより自分ごととして捉えることができ、理論と実際がつながる貴重な機会と考えています。

中川ゼミ

千曲市森地区・長野市大岡地区フィールドワーク

中川 亮平 (グローバルマネジメント学部 准教授)



中川ゼミではKDDI株式会社の指導を仰ぎながら、千曲市森地区「あんずの里」と長野市大岡地区の住民集会を訪問し、地域の現状・課題について住民の方々との対話を通じて学ぶ機会をいただきました。

全国有数のあんずの産地である千曲市森地区は後継問題を抱えており、ここに若い世代の人たちの知恵や技術を活かして活性化させたいとの意見を伺いました。また長野市大岡地区では企業の撤退や公共施設の閉鎖などが相次ぎ人口の流出と高齢化が急速に進む一方で、現在では住民の3分の1もの人が一ターン移住者であるという興味深い発見もありました。両地区での重要な発見は、社会・経済的には大きな変化がある傍らで、人々の生活の営みは脈々と続いてきたことを再認識したことでした。

東ゼミ

長野県 ここからエシカルMAP (諏訪編)

東 俊之 (グローバルマネジメント学部 准教授)



世の中の与える影響を考えて、より良い消費行動をしようという「エシカル消費」。このエシカル消費を進めているお店や企業を自分たちで見つけてヒアリングを行い、Web上のMAPに掲載する活動を、CSIの協力のもと東ゼミ(3年生8名)が、長野県くらし安全・消費生活課からの受託(というよりも「協働」)で実施しました。

これまでも県内様々な地域のエシカルMAPが作成されましたが、今回は「諏訪編」。調査を通じて学生の皆さんは、「身近なところに『エシカル消費』があることを知れた」や「自分たちにできることが多くあることに気づかされた」、「相手の方の事業に対する思いが伝わった」など、座学での授業では経験できない学びを得られたようです。(詳しくは、「長野県 ここからエシカルMAP」で検索。南信エリアの諏訪地域が、私たちが担当した箇所です)

2022年度「デリバリー・アカデミア」実績一覧

年度	月日	団体名	講座名	講師名
2022	5月 12日	木曽青峰高等学校	だれでもできる哲学対話	馬場智一 准教授
	7月 12日	須坂市立東中学校	だれでもできる哲学対話	馬場智一 准教授
	7月 12日	長野県町村 OB会	味・匂い・食感のお話ー食品加工と食品開発ー	小木曾加奈 准教授
	7月 29日	一般社団法人 長野上水内教育会	だれでもできる哲学対話	馬場智一 准教授
	8月 29日	諏訪二葉高等学校	だれでもできる哲学対話	馬場智一 准教授
	8月 30日	長野市篠ノ井交流センター	「あぶら」を考える	杉山英子 教授
	10月 27日	宮田村公民館	終末糖化産物 (AGEs) と健康	石井陽子 教授
	11月 30日	松本市女性センター	日本における家族の変動について	築山秀夫 教授
	12月 13日	長野市篠ノ井老人福祉センター	音楽教養講座 きくことでみえてくるもの	大南匠 教授
	2月 8日	長野市環境部	私たちの暮らしとエネルギー産業の変革	穴山梯三 教授
	2月 28日	長野市篠ノ井老人福祉センター	中国古典詩の楽しみ	谷口真由実 教授
	3月 3日	長野市生涯学習センター	地域産業の活性化要因について	尹 大栄 教授
	3月 16日	諏訪二葉高等学校	だれでもできる哲学対話	馬場智一 准教授

人材育成

KISO女性・若者起業塾

主催：長野県木曽地域振興局 2022年9月1日～10月3日（全3回、対面・オンライン形式）



KISO女性・若者起業塾は、開塾から4年目を迎えました。今年度は過去最多の21名から参加申込をいただきました。新型コロナウイルス感染症の影響により、一昨年度、昨年度とオンライン開催が続いていましたが、今年は3年ぶりに対面での講義を実施することができました。講師の生の講義から大いにパワーをいただき、受講者からも「行動しようという意欲が生まれた」との声が聞かれました。

今年は例年以上に木曽管内の色々な町村の方が参加してくださり、バラエティに富んだ受講者の姿が見られました。受講生同士の交流も活発に行われており、人脈づくりという意味でも起業塾の果たす役割があったのではないかと感じています。

受講生の方とお話する中で、担当者自身も、自分のこれまでを振り返り、今後何をやりたいか考える機会になりました。今後も木曽地域の皆様を後押しする機会を提供できればと思います。

（長野県木曽地域振興局商工観光課 丸山和希さん）

受講者の声

- 今まで考えたことのなかった細かな思いを文字にしてみることでより未来への希望を見つけることができました。
- 起業についての基本はもちろん今後生きていくのに大事なマインドを学べた。

地域おこし協力隊起業塾

主催：長野県北信地域振興局 2022年7月27日～9月20日（全3回、オンライン形式）



北信地域への定住を目標に活動している地域おこし協力隊に向けて、秋葉先生から、起業に対するマインドセットやビジネス手法をじっくりお教えいただきました。自分自身、協力隊に着任して半年以上が経ちましたが、仕事や環境に慣れつつも、視野が狭くなってきていることを感じていました。起業塾は「好きを仕事に」が大きなテーマです。様々なワークを通し、協力隊の任期中や任期後のビジョンを、具体的に言語化することができるようになりました。また、ビジョンが明確になったことで、興味や目標が同じ協力隊や人物を見つけて声をかけられるようになり、つながりを生むことができました。今と未来に生きる知識や力をいただき、大変貴重な機会となりました。

（飯山市地域おこし協力隊 高梨葉月さん）

ついたち会 なにかやっていたり、やっていなかったりする人のゆるい交流会

“ついたち会”はその名の通り毎月1日に開催されるゆるい交流会です。ゆるいというのはその日どんな人に出会えるのかどんな話をするのか、どんな学びに出会えるのかはその日の雰囲気や集まったメンバー次第ということです。

ついたち会は、合同会社キキのメンバーが「地域の人や周りの若者とつどい、そこで出てくる話や日々の気づき、学びがあって面白い」と感じたことからはじまりました。そこから地域で活躍している人も、一人で活動している子も、ちょっと興味がある子も無目的に話せる場があったらいいなと思い、オンラインで活動を始めました。

トークテーマはその月々によって変わります。メンバーが少ない時は「最近どう?」というフランクな会話からはじまり、ちょっともやっとしたこと、嬉しかったこと、テンション上がったことなどを話します。時にはイベントを設けて参加者同士で目標を立て質問をしあったりもします。2022年になり感染症も落ち着いてきてからはグローバルマネジメント学部生4年の小倉さんが中心となって経営するODDO coffeeにて行っています。

初めは数人で行っていましたが、今では大学の枠をこえ、他大学の学生や地域で活躍する社会人など幅広く集まって交流をしています。今年の秋には理事長裁量経費をいただきました。今後は精力的に宣伝をできるようになったり、会の中で紹介されたイベントに参加しやすくなるような制度を組み立てていきたいと思っています。ついたち会に関わった人個々人がそれぞれの関わり方を持ち、ふらっとつながり続けられる場をこれからも作っていききたいと思います。

（合同会社キキさん）





屋代高等学校・附属中学校 SSHミニフォーラム

屋代高等学校・附属中学校では、3年間・6年間を通して体系的な探究活動を行っており、中学校では、地域・信州・日本・世界と、次第にグローバルな視点を獲得できるようなプログラム、高校では、一人での研究から始まってグループでの研究、さらには外部発表等の情報発信までのプロセスを学習しています。今年度も探究活動の一環として、長野県立大学の秋葉先生にご来校いただき、特別講義を2回実施しました。

SDGsの意味や歴史的な流れを学び、私たちの周りには生活につながるSDGsに関わる課題が多く存在し、それらを解決しようとしている企業が信州にも多く存在していること等を紹介していただきました。参加した生徒は「素晴らしいご講演をありがとうございました。私はSDGsは「環境保護」や「人権尊重」に関するものだと思っていました。そしてただの綺麗事だとすら思っていました。しかし今日秋葉先生のお話をお聴きして、SDGsとは世界中の課題をまとめてチャンスを創り出し、新たなビジネスにつなげるというものであるということを知りました。」等の感想を寄せてくれました。

秋葉先生のエネルギー感ある特別授業を体感した生徒たちには、身の回りのことを自分事として考え、自らアクションを起こし続ける大人になってもらいたいと思っています。

(屋代高等学校 SSH主任 大石 超さん)



本学のSDGsに関する主なトピック

- ペットボトルを使わないウォーターサーバーの設置
「プラスチックごみを削減したい」という学生の提案により、理事長裁量経費で学内に給水ボトル不使用のサーバーが設置されました。
- SDGs・地域貢献アイデアコンペティションの開催
第一生命保険(株)長野支社様と炭平コーポレーション(株)様のご支援のもと、学生のアイデアをカタチにしてSDGsや地域貢献を進めました。

- 地場産業×気候変動影響調査事業への参加
気候変動が地域の産業に及ぼす影響を調査する環境省事業。本学から学生が3チーム参加し調査結果を発表しました。
- OECD 30by30の取組支援
2030年までに陸と海の30%以上を健全な生態系として効果的に保全しようとする目標(30by30)をCSI地域コーディネーターが地域で展開するために勉強会を開催しました。

- 電力を全て再生可能エネルギーで調達、国公立大学として初の再エネ100%大学達成
本学では、使用する電力を長野県の水力発電由来の電力100%で調達しています。この取り組みにより第22回グリーン購入大賞「優秀賞」を受賞しました。



秋葉センター長 講演・委員会等活動実績 (2022.4～2023.3)

日付	件名
4月	飯山市長との意見交換会
5月	「みんなで支える森林づくり県民会議(第1回)」参加(構成員) 屋代高校・附属中学校「SSHミニフォーラム(1回目)」講師 長野県みらい基金休眠預金イノベーション事業審査会参加(審査委員長)
6月	滋賀県公立大学法人評価委員会参加(委員) 長野県生涯学習審議会参加(委員長代理) 公益財団法人日本栄養士会会報へ寄稿
7月	滋賀県公立大学法人評価委員会参加(委員) 北信地域振興局「地域おこし協力隊起業塾(1回目)」講師 滋賀県公立大学法人評価委員会参加(委員) ゼロカーボン長野プログラム2022 グリーンインフラフォーラム基調講演
8月	北信地域振興局「地域おこし協力隊起業塾(2回目)」講師 「みんなで支える森林づくり県民会議(第2回)」参加(構成員) 長野県契約審議会参加(委員) 木曽地域振興局「KISO女性・若者起業塾(1回目)」講師 木曽地域振興局「KISO女性・若者起業塾フォローアップ会」講師
9月	長野県生涯学習審議会参加(委員長代理) 長野県産業イノベーション推進協議会本部会議(本部員) 木曽地域振興局「KISO女性・若者起業塾(2回目)」講師 北信地域振興局「地域おこし協力隊起業塾(3回目)」講師 木曽地域振興局「KISO女性・若者起業塾(3回目)」講師
10月	

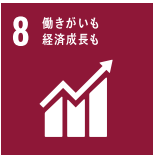
日付	件名
10月	長野県生涯学習審議会提言書を教育長に提出(委員長代理) 屋代高校・附属中学校「SSHミニフォーラム(2回目)」講師
11月	「みんなで支える森林づくり県民会議(第3回)」参加(構成員) 長野県契約審議会参加(委員)
12月	農水省・国交省「2027年国際園芸博覧会 政府出展懇談会」第1回参加(委員) 農水省「『持続可能な食を支える食育の推進』に係る検討～フードガイド見直しに向けたワーキンググループ」1回目参加(委員) 長野経済研究所会報「経済月報2022.12」SDGs特集への特別寄稿
1月	神奈川県・厚木社会福祉協議会「企業・NPO・大学等パートナーシップミーティング2022」基調講演 日本生活協同組合連合会「2023年 全国方針検討集会」特別講演 長野県産業イノベーション推進協議会本部会議(本部員) 農水省・環境省・消費者庁事業「サステナアワード2022」参加(審査委員長) 農水省・国交省「2027年国際園芸博覧会 政府出展懇談会」第2回参加(委員) 長野県契約審議会参加(委員) CSI公開講座「中小企業のSDGs」スピーカー
2月	滋賀県公立大学法人評価委員会参加(委員) 農水省「『持続可能な食を支える食育の推進』に係る検討～フードガイド見直しに向けたワーキンググループ」2回目参加(委員) 長野県ソーシャル・ビジネス創業支援金事例報告会 講演 農水省「『持続可能な食を支える食育の推進』に係る検討～フードガイド見直しに向けたワーキンググループ」3回目参加(委員) 農水省・国交省「2027年国際園芸博覧会 政府出展懇談会」第3回参加(委員)
3月	「みんなで支える森林づくり県民会議(第4回)」参加(構成員) 暮らすroom'sプロジェクト「『女性活躍再定義』交流会 多様な人がそれぞれの形で幸せに暮らせる未来へ」登壇

飯山高等学校 連携事業

北信地域振興局では、北信地域の若者に地域の課題を知り「自ら考えること」を通じた学びの場を提供することで、本人の進路選択や成長への寄与はもとより、地域の次代を担う若者の育成を目指し、令和元年より主催事業を展開しています。

飯山高等学校では、高校生が魅力的な就労・起業をイメージできるよう、「働くこと、学ぶこと」を深く考える機会を設けることができました。6月30日、県立大グローバルマネジメント学部の馬場智一准教授による哲学対話を行いました。生徒の皆さんは、問いを立て、その問いについて話し合うなかで、議論が深まっていくことの面白さを体感していました。また、7月14日には、飯山で働く事業者4名をお迎えし、前回出された「なぜ休みは土日しかないのか？」等の問いについて、ゲストと一緒に考えました。普段の活動範囲では出会うことのない大人と意見を交わすことで、将来を考える刺激になったようでした。対話を通じて自己を見つめ、未来を考える良い機会になったと思います。

(北信地域振興局企画振興課 横澤光恵さん)



農林水産省・環境省・消費者庁 サステナアワード2022

生産と消費のあり方を持続可能に変えていく「あふの環2030プロジェクト～食と農林水産業のサステナビリティを考える～」に本学も発足の2020年から参画中。持続可能な取り組みを全国から動画で募集し表彰する「サステナアワード」も今年3年目。秋葉センター長が審査委員長として今年もお手伝いしました。今年度は長野県から「松川町 ゆうき給食とどけ隊」が消費者庁長官賞を受賞しました。



2027年国際園芸博覧会政府出展懇談会委員

1990年大阪花博以来、日本において37年ぶりの開催となる「2027年国際園芸博覧会」の政府出展懇談会委員に、秋葉センター長が就任しました。今後、本博覧会のテーマ「幸せを創る明日の風景」等への理解を先導するため、政府懇談会委員として、持続可能な農業と環境、SDGs、サステナビリティなどの観点を中心に、大きな役割を担うことになります。

地域コーディネーターの活動

県内の各地域で活躍する4名の地域コーディネーター。
事業者や企業、自治体や地域とCSIを結びます。



東信担当

藤岡 聡子 Fujioka Satoko

福祉環境設計士。(株)ReDo 代表取締役。「老人ホームに老人しかいないって変だ。」24歳で創業メンバーとして有料老人ホームを創業、アーティスト、大学生らと共に町に開いた居場所づくりを実践。2015年デンマークに留学し、人の暮らしの環境設計の見地を重ね帰国。東京都での空き家活用を経て、2019年より長野県軽井沢町にて「診療所と大きな台所があるところほっちのロッヂ」を始め医師と共に共同代表。共著に『ケアとまちづくり、ときどきアート(2020中外医学社)』『社会的処方(2020学芸出版社)』。アジア太平洋地域・高齢者ケアイノベーションアワード2022グランプリ受賞者。

県立大生がつくる「体温が2度上がる日」

大学がない軽井沢町にとって、大学生に出会うことはほとんどなく、ましてやその大学生が地元の小中高生向けに企画を起こすことなど今まで行われてきませんでした。そこで、大学生が町で活動できるきっかけを掘り起こすきっかけとなるプログラムを開始。主に4月～10月の時期に、個々人が関心のあるテーマを持って町に飛び込み、町民らと場を立ち上げていくことをコーディネーターとして併走しました。プログラムには6名が参加。「マルシェ運営」「高校生の学習・マイプロ支援」など様々な分野が生まれ、これまで町中になかった人の流れを実に豊かに機嫌良く作り上げてくれました。印象的だったのは「体温が2度上がる日」。日中稼働していないカフェを借り、県立大生が地元小中高生向けに、気候変動、LGBTQ、夢の持ち方などをそれぞれに講座を持ち、2日間にわたって実に多くの対象者に向けて開催した企画です。「やってみたい!」の気持ちがこれほどまでに人を惹きつけるのだと、私自身も大きな学びとなりました。

北信担当

藤原 正賢 Fujiwara Masataka

長野県長野市出身。慶應義塾大学政策・メディア研究科修了。大学時代は、長野県出身の若年層が集まるイベント「信州若者1000人会議」の立ち上げなどに携わる。その後、2016年に株式会社BAZUKURIを創業。現在は長野県の移住総合WEBメディア「SuuHaa」の編集長や、郷土食の価値の再定義プロジェクト「OYAKI FARM」など、様々な取り組みに携わっている。2022年より株式会社Huuuu取締役。



開学から5年。 県立大生が、地域に新たな色を加えていく。

長野県立大学が開学して5年が経ちました。古着屋、コーヒー屋など長野県立大学の学生がキッカケとなり、様々な取り組みが生まれています。これまでの長野で、学生発でここまで同時多発的に様々な取り組みが生まれたことは無かったと思います。今期も新たな一歩を踏み出す1年生や2年生とコミュニケーションをとる機会も多くありました。先輩の背中を見て、新たな一歩を踏み出し、地域の人たちが見守る。そんな循環が生まれ始めていると感じています。変化の早い時代で、いかに芽を潰さずに、県立大生が新たな動きや風を起こしやすい環境をつくるのか。これは地域の自治体・企業に対して、県立大学生から向けられている問いかと思います。次の5年・10年に向けて、規模よりも質を求め、県立大生と一緒に長野から多様な取り組みが生まれる状態をつくっていきたいです。



中南信担当

北埜 航太 kitano Kota

1994年、東京都町田市生まれ。間（あわい）という屋号で、ライターとして都市と里山、地域とZ世代、行政と住民などの間に入って、調整や関係構築、企画の共創などに挑戦中。具体的には、2019年より辰野町の協力隊として、都市部のZ世代が地域づくりに関わる関係・共創人口創出プログラム「お困りごとtrip」等の企画コーディネーター。2022年11月より長野県環境政策課のゼロカーボン社会共創コーディネーター。



日本人が育んできた 里山という生態系を再編集して未来につなぐ

私は長野県の里山に惹かれて3年前、移住しました。そもそも里山とは、自然界である奥山と人間界である里の間（あわい）に位置するもので、日本人が育んできた、人と自然が共生する、循環型の生態系です。近年では、気候変動対策において、脱炭素とならんで生物多様性が世界的に重要視され、里山は生物多様性に富んだ日本独自の生態系としても注目されています。

一方で、ライフスタイルの変容に伴って、荒廃した里山が増加。市民による保全活動の持続性にも課題があります。そこで、2022年8月から企業のCSRやCSVとして里山保全に出資をしてもらう新たなプログラムを、日本自然保護協会と辰野町と共創しています。これまでに多様な地域プレイヤーとの勉強会や、里山へのフィールドリサーチを経て、現在は2023年のリリースに向けたプログラムの企画段階。単なる保全にとどまらず、地域の関係人口を増やす体験プログラムにしたり、保全によって育まれる里山の恵みを商品化するなど、里山再生を通じた地域創生も目指していきます。グローバルな目線で里山の価値を再発見・再編集しながら、具体的な小さな一歩を辰野町から踏み出していきたいです！



南信担当

新井 直彦 Arai Naohiko

1980年生まれ。長野県下伊那郡松川町出身・在住。自治体職員として、総合計画や地方創生施策を主に担当し、自然との共生や木材の地域内循環、若者の定住も見据えた新たなコミュニティ形成を目指すMMM（Matsukawa×Makes×MyLife）プロジェクトの企画・運営などを手がけてきた。社会教育主事、公民館主事など教育分野にも長年携わってきた経験から、Project Based Learningをベースとした高校生や大学生との地域協働事業を主な活動フィールドとしながら、自治と共創の地域づくりを“学び”からアプローチしていく。



偶発的な出会いを生み出す little free library

大自然の森の中に、小さな図書室をつくる“little free library project”が松川町で始まりました。これは、小さな箱に収められた本を無料で貸し出すアメリカ合衆国発祥の取組みをもとにした、いつでも、誰でも、自由に本を借りることのできる図書箱です。

プロジェクトのきっかけの1つになったのが、図書館をテーマにした大学生との対話でした。県内では77全市町村と長野県による協働電子図書館“デジとしょ信州”がスタートしてより便利になった中、図書事業をまた違った立場や角度から盛り上げていこうと学生たちが集い、「リアルな図書館の魅力や可能性は何か」という問いをたてて考えました。そこから見出されたキーワードは、「発見」そして「想定外」。この小さな図書箱は、地域の子供たちと組み立てるところからはじめ、松川町およりての森にその第1号機を設置しました。一緒にやりたいという仲間たちが県内外から訪れはじめ、本や人との偶発的な出会いがここから生まれつつあります。



名 称	公立大学法人 長野県立大学ソーシャル・イノベーション創出センター (Center for Social Innovation Initiatives, CSI)
設 立	2018 (平成30) 年4月1日
所 在 地	長野県長野市西後町614-4 (長野県立大学後町キャンパス)
2022年度 S T A F F	秋葉 芳江 センター長 赤羽 久美子 須藤 展啓 小林 絵美子

制 作 | カシヨ株式会社
印 刷 | 株式会社総合印刷

 <https://www.u-nagano.ac.jp/cooperation/csi/>
 <https://www.facebook.com/CSI.nagano/>
 csi@u-nagano.ac.jp
 026-262-1725  026-262-1726



長野県立大学は
「長野県SDGs推進企業登録制度」
第1期登録組織です

発行日 2023年3月27日
※本誌記載内容の無断転載はご遠慮ください

